

Title	近世における一漁村の人口動態：紀伊国牟婁郡須賀利浦
Sub Title	The population of a fishery village in the Rokugawa era
Author	速水, 融
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1953
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.46, No.12 (1953. 12) ,p.1031(63)- 1039(71)
JaLC DOI	10.14991/001.19531201-0063
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531201-0063">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19531201-0063</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

註(四) Vail, Grether, Cox: op. cit. p. 679.

註(五) 提供せられるサービスが極端に制限せられた場合は「消費者は特定の給油所で特定の時間が割り当てられ、そしてそれ以外にはガソリンを購入する機会はなく、彼がガソリンを補給するためには自分の家まで歸らなければならないであろう」。しかし一方反対の場合は「給油所は広く各地に分散しており如何なる自動車も一マイル以上も走らなければならないことはなく、又交通の便はしつ通りを横切る必要もなく、サービスをうけるために二三分以上も待たなければならないようなこともないであろう」。

Vail, Grether, Cox: op. cit. p. 673.  
註(六) 例えば配給費の調査においても調査者の異なるに應じてその結果もかなり異つたものとなつて居る。P. D. Converse and H. W. Huegy, "Elements of Marketing" 1942, p. 817; N. H. Engle, "Marketing Costs and Efficiency" (The Journal of Capital Management, Sept. 1942) pp. 211-14; P. W. Stewart, L. Field and J. F. Dewhurst, "Does Distribution Cost Too Much? 1939; J. K. Galbraith and J. D. Black, "The Quantitative Position of Marketing in the U.S." (Quarterly Journal of Economics, May 1935) 及び(四)の資料を比較してもその結果には相當の距たりがみられる。

資料

近世における一漁村の人口動態

—紀伊國牟婁郡須賀利浦—

速 水 融

近世漁村の人口については一般にその變動が激しかつたと考  
えられている。當時の識者の眼にもこの事はかなりの程度に映  
じていた。たとえば、佐藤信季のやや誇張に満ちた表現ではあ  
るが「不獵永く繼ぎ、且つ凶作にて米穀の高直なる時は、困窮  
すること極めて甚しく、老若男女枕を並べて餓死し、一村人烟  
を絶するに至ること往々にありて、予此を目撃せり。」(註)と言  
うが如きはその激しさを想像させるものである。しかし、では  
その變動がどの程度であつたのか、その内容如何についての具  
體的な實證については未だ發表されていない。

(註) 「漁村維持法」日本産業資料大系第四卷所收)より。  
なおこの著書は安永九年信淵の父信季によつて書かれた事  
になつてゐるが、實際は信淵の著書であろうと言ふのが一  
般の見解である。

近世における一漁村の人口動態

しかし漁村人口といつても、その内容によつて包攝される範  
圍が異つて來るのは勿論である。第一に、漁村の如く季節的勞  
働が要求される處では一年を通じての人口は不定であろう。即  
ち、漁期には附近の農村や又は一部の漁村から加子勞働力が入  
り込み、是等は漁期が終れば歸村してしまふ。又逆に本來その  
村の住民だつた者が漁場を求めて出てしまふ。第二に、數年數  
十年間をとつてみた場合、信季の言ひ如く、饑饉やその他の天  
災が與へた影響は、耕作地の少い漁村にとつて農村以上に深刻  
なものがあつたらう事も十分想像される。

しかし他方、特に孤立的な漁村においては、四圍の開けた農  
村に比し、流行病による被害から免れる事ができたし、又廻船  
航路の關係によつては、非合法的な手段(註)によつてではある  
にせよ、饑饉の年と雖も主食類の購入が容易でもあつた。商  
品作物のない農村に對して、魚價さえよければ、貨幣收入は保  
證されているのも勿論である。是等の諸事情は漁村だからとい  
つて直ちに人口の變動を來す原因がより多かつたと考へる事を  
反省させるものである。少くも、その年間の變動はさて置き、  
長期間をとつてみた場合、一口に農村に比して動きがより激し  
かつたと極めてしまふのは早計であらう。

(註) たとえば、天保年間、志摩國波切村で生じた事件—  
御城米廻船船頭と地元庄屋との結託により、難船と詐つて  
多量の米を取引し、是が露顯した事件—の如く、城米輸  
送についてすら密賣買が認められる以上、商人間の納屋米

廻船についてはかゝる不正取引は日常事であつた事と推測される。

二

本稿においては、このような見地から一漁村における人口の變動を史料により實證するのであるが、本論に入る前にこの村の概観と使用した史料について若干觸れておきたい。

紀伊國牟婁郡須賀利浦は紀伊半島東海岸に面する漁村で和歌山藩に屬していた。(註一) 立地條件については附近漁村の大多數と同じく深い入江の奥に位置し、港としては恵れている。しかし山地が迫つてゐるため田畑は極めて少い。慶長六年の檢地帳によれば、村高僅か七石八斗餘、しかもその内大部分が屋敷地であり、(註二) 附近數村の檢地帳にもこの村からの入作分の記載はごく僅かしかみられぬ處から、近世初頭からこの村は農業以外の、恐らくは漁業や廻船業、林業などにその生計の途を見出してゐたものと推測される。その後の新田開發によつて十八石八斗餘の村高を増加してゐるとはいへ、近世を通じて農業生産への依存は極めて低かつた。寛政五年の村明細帳にもこの村の渡世方につき「須賀利浦之儀年中漁稼仕申候尤漁間には薪柴を伐り出し諸廻船へ賣廻船之宿をも仕渡世仕申候」と記されている。ここで注意すべきはこの漁村が「年中漁稼」の可能であつた村である事で、事實春から夏にかけて鰹釣り、秋には鯖釣及び細魚(ヒルさんま)漁、冬には名吉(ヒぼら)及び鮪網と

比較的平均した勞働力を要求してゐた。従つて關東や裏日本の漁村に比べれば年間の人口移動は遙かに少かつたものと思われ

る。(註一) なおこの村の位置については拙稿「近世における漁村の移住と漁場の利用、支配の關係について」(三田學會雜誌第四十六卷第七號所收)の附近略圖を参照されたい。

(註二) 屋敷地の高六石四斗餘、反當の石付けは一石四斗、百姓家數五十六間。是に對し耕地は合計一反二畝であり、筆數は十三、所持者は僅か七人となつてゐる。

次に主として利用した史料であるが、これは「八歳子惣人數増減家數船數其外改書上帳」(註)なる題名を持つ調査書で、毎年正月に大庄屋宛に差し出されてゐる。大庄屋から藩へは恐らく管下各村の集計を報告したものであろうが詳細は不明である。今寛政二年戌年の書上帳を擧げてみよう。

- 須賀利浦
- 惣惣人數三百五拾六人
- 内 百八拾貳人男 内百三拾五人 拾五歳
- 内 百七拾四人女 以上六拾歳以下男
- 一戌惣人數三百五拾七人
- 内 百八拾二人男 内百三拾五人 拾五歳
- 内 百七拾五人女 以上六拾歳以下男
- 右之譯

七人 内 三人男 八歳子 四人女

- 嘉右衛門男子普齋寺 延藏男子同寺
- 一富之助 八歳 一三之助 八歳
- 藤助男子同寺 庄藏女子同寺
- 一志け松 八歳 一いく 八歳
- 甚之助女子同寺 瀬藏女子同寺
- 一つね 八歳 一志ち 八歳
- 吉之丞女子同寺
- 一ゑん 八歳

出入 須賀利浦甚五郎(マ、)年三拾六歳相賀組小山浦庄七方へ縁付

入人 尾鷲組矢濱村傳之丞俸市松年拾七歳須賀利浦茂七方へ養子

- 六人内 貳人せん氣病男 貳人たん病男 死人
- 貳人さん後女
- 指引 壹人女 戌年増

- 三拾軒 本役
- 拾貳軒 貳分半役
- 七艘 經船
- 貳艘 さつは船

近世における一漁村の人口動態

一船數拾三艘 内 貳艘 てんと船

貳艘 いさは船

貳帖 細魚網

貳帖 糸網

五帖 糸網

壹帖 名吉網

右者須賀利浦戌年人數出入差引増減家數船數等相改申所如此御座候以上

庄屋

吉之丞

肝煎

善藏

玉置元右衛門殿

(註) 和歌山藩では七歳以下の者はあらゆる人口調査から除外されてゐる。この史料も明治二年迄は人口については八歳以上の者のみを記し、三年以後になつて漸く全人口を記してゐる。宗門帳、村明細帳その他についても同様である。従つて以下人口とあるはすべて八歳以上に限られることになる。なおこの史料は以下單に書上帳と呼ぶ事にする。

以上示せる如く、この書上帳は年々變動する項目を記載する一種の村明細帳とみる事ができる。しかし、この史料の存在する安永—明治年間には、他により細密な村明細帳が差し出されてゐる。今寛政五年九月の村明細帳と同年正月の書上帳を比

べてみると記載事項の數値はすべて同一である。しかし明治二年七月の村明細帳と同年正月の書上帳には逆に全項目に亘る差異が認められ、その數は六ヶ月間の経過をもつては納得し難いかなりの開きであるところから少くもこの年の兩史料の間には調査内容の違いがあると言えらる。又宗門帳との比較は、同年代のものがないので不可能であるが安永三年の宗門改帳は人數三百四十人となつて居り、同四年の書上帳の人數三百五十九人と間に若干の相違がみられる。この相違は家數になると更に著しく、前者では八十三を數えるが、後者では五十七となつて居り、これは明らかに記載内容の相違であらう。家數については本稿では觸れないが、元祿十一年の名寄帳及び享保五年の「家主宗門改帳」に無判の者が若干名居り、それを除いた有判の百姓數が五十七を數えるところから恐らくは無判の百姓は新しい分家であり、この數を含めるが否かにより宗門帳と書上帳乃至は村明細帳記載の家數の相違が出て來るものと思はれる。書上帳の家數は寛政十一年に(寛政十一年は史料缺)五十八から一擧に八十二に増加しているが、これも前述の意味において始めて理解されよう。寛政十一年にはこの村で「村中人別並持高當作書上帳」が作成されているのも決して偶然ではなく、この年における新しい分家の法的な獨立が確認された事と結び付けて考へる事ができる。

さてこのように家數はさて置き、書上帳に記載されている人口は實際の須賀利浦のそれとは若干の點で相違がある。七歳以

下の者、それから地主、醫師、僧侶等特殊の階級を構成する者は除かれるが、他方出稼中の者は含まれてしまふ。(註)しかし連年に亘る宗門帳が未だ見出されないこの村及びこの地方に於つて、書上帳は殆んど唯一の人口統計史料であり、これによつてその趨勢を知るより外にない。

(註) 出稼人及び廻船乗はこの時期を通じて十人内外で比較的一定している。

三

須賀利浦の人口數についての初期の記録は全く見出し得ない。寶永六年に至り漸く全人口を書いた「加子米古未進人別帳」を見出し得るが、是により八歳以上の人口を算出してみると男二百七、女百六十九、合計三百七十六人となつて居る。次に四十四年後の寶曆三年の村明細帳は人數三百九十八、男二百九十九、女百九十九を示して居り、次の安永三年の宗門帳による全人口三百四十、男百七十六、女百六十三、不明一に對してはやや多數となつて居る。これらの諸指標は史料の種類が異なるから一貫したものではない。しかし、近世中期におけるこの村の人口の動きが決して増加の傾向を示してはなかつた事を十分推測せしめる。この事はこの村における最重要の生産手段たる漁船の減少によつても裏付けられよう。寶永六年の史料はこの村に大型の鯨船一艘、鯉船十一艘を含めて合計三十四艘の漁船が存在していた事を示している。この數は寶曆年間二十七から更に安

永四年の十三艘に迄減少した。書上帳の始る安永四年はこのようにこの村の狀態が最も衰亡していた時期と一應判断し得よう。

次表は書上帳により安永七年から慶應四年に至る九十年間の人口變化を五年毎に示したものである。但し史料缺如の分は翌年或いは翌々年の分をとつてあるから必ずしも五年毎とはなつていない。表に見る如く安永—文化中期に至る停滞期とそれ以後の上昇期の二つに明確に分れて居る。勿論夫々の時期とも

年代 (西曆)	總數	男	女
安永 7 (1778)	376	192	184
天明 3 (1783)	361	177	184
天明 8 (1788)	351	179	172
寛政 5 (1793)	363	186	177
寛政 10 (1798)	373	187	191
享和 4 (1804)	359	166	193
文化 5 (1808)	354	164	190
文化 10 (1813)	358	174	184
文化 15 (1818)	389	191	198
文政 6 (1823)	399	190	209
文政 11 (1828)	403	196	207
天保 4 (1833)	417	200	217
天保 9 (1838)	415	208	207
天保 14 (1843)	429	206	223
弘化 5 (1848)	406	199	207
安政 2 (1855)	433	214	219
安政 5 (1858)	417	210	207
文久 3 (1863)	424	220	204
慶應 4 (1868)	434	224	210

れない。しかし、天明五年の死人二十一、六年の十六はそれ迄の十人内外の死人に對しやや高くなつて居る。天明五年の死人の内譯は、男四人の海上遭難によるものを除けば他の年と變りなく、又翌年も同様である。ではこの地方に對し、全然影響がなかつたのか。附近の地方的な中心をなす尾鷲(林浦、南浦、中井浦、野地村及び堀北浦の街續きの五ヶ村合計)では天明四年人口三千七百七十四に對し一年間に死人二百九内、風疫(流行病)によるもの百四十五となつて居り、かなり多くの死亡者を出したところから須賀利浦を含め一帯に若干の人口減退をもたらしたことになる。

ではこの時期における須賀利浦人口の停滞は何處にその基本的原因があるのか。第一に安永七年から文化十年に至る間の人口の移動をみると他村からの流入が六十五人であるのに對し、他村への流出が十四人に過ぎない事は、この年間の人口の停滞が人口の移動に求められない事を物語つて居る。尤もこの間史料の缺如して居る五ヶ年は算定し得ない。むしろこの年間に須賀利浦は差引五十人餘りの他村人口の流入を受けているにも拘らずこの間には停滞、更には安永七年と文化十年との間には僅少ではあるが減少さえみられるのは死亡率の高さ、若しくは出生率の低さにその原因を求めらる事ができよう。この藩の支配下にある村々からは史料記載の關係上出生率は求むべくもないが、死亡率—勿論八歳以上

若干の起伏は持つて居る。天明年間の關東・奥羽を中心とする飢饉は紀伊半島僻遠のこの地には人口の上で殆んど影響がみら

近世における一漁村の人口動態

の者——の平均を算定してみると千人に付二十八人となつて居る。二十人以上の死亡者のある年は天明五、寛政十二、享和四、文化五年の四回に亘つて居り、後年と比較してかなり頻繁である。是に反し毎年八歳子として記載されている者の数は一年平均千人に付二十三人であり、死亡率を遙か下廻つて居る。この死亡率は當時(安永——文化)の他村と比較してみると、早田浦が千人に付十二人、九木浦十七人、大曾根浦二十一人となつて居り、他方八歳子の率は千人に付夫々二十九、二十三、二十八となつて居る。従つて是等三ヶ村では何れもこの時期に人口は四割以上も増加している。結局須賀利浦では八歳子に生育する者の率よりも、死亡率の高さにその停滞の眞因が求められるように思われる。と言つてもその差はさしたるものではなく、又他村からの人口流入はこの期間を通じて人口の停滞こそもたらしたが、急激な減少は来さなかつた。附近漁村の人口増加に對し何故この村のみが停滞していたのかは書上帳のみをもつては解明し難い。夫々の村の生産構造の差異が経済的な原因となつて居るのであるが、その内容については後日を期したい。

さて須賀利浦は文化末期を境に急激に人口を増加させ、弘化年間の一時的減少も直ちに回復して明治に至るわけである。通説的には近世農村の疲弊期に當つて逆の現象が見られることになる。前記の三漁村についてみても共に相當の減少を示し、慶應四年の數字は早田浦の如きは安永年間より下廻るといつた減

退振りである。これらの比較は後で觸れる事にして、先ずこの時期の人口増加の内容について考察してみよう。

文化十年から十五年に至る五年間に三十一人の増加は何によつてもたらされたのだろうか。八歳子の合計は四十四人、死亡は三十七人であるから自然増加は七人となる。他方人口の出入をみると八人三十二人に對し出入は九人、差引二十三人の増加であり、この五年間かなりの人口流入があつた事が明らかである。更に文化十五年以後、人口が一時的減退を示す直前の天保十四年迄の二十五年間をとつてみると、死亡率は千人に付き二十四人、八歳子は千人に付二十一人で、依然として自然減少を見せて居る。この時期においても人口増加の主因となつたのは自然減少を凌駕する人口の流入であつたことが注目される。その数は八人一〇八、出入四〇、差引六十八人の増加で前期以上の高さを示している。

同じ年代をとつて比較してみると、たとえば早田浦は三百一人から二百二十七人、大曾根浦は百六十六人から百三十九人へと減少し九木浦のみは五百八十八人から六百二十二人へと増加を見せて居る。是等三ヶ村について言える事は共に天保七年から八年にかけての飢饉の影響の相當強いことである。この三ヶ村を通じて平均約八割の村民が死亡している。更に尾鷲になるとこの數値は大きく、天保八年の人口四千八百五十四は一年間に三千九百三十一と二〇%近くを減じて居る。そして尾鷲は以後明治に至る迄この痛手から回復し得ないのであるが、須賀利浦

をみると、この影響は天明時と同様殆んどない事が立證される。この年の死亡者數十九は平年よりやや高くはあつてもそれ程の損害ではなく、翌々年には回復している。この年の多數の死者は死因に流行病とあり、飢饉で抵抗力の弱つた處へ傳染病の流行が加つたものであろう。かかる時期にあつて須賀利浦は恐らくその地理的な孤立性が流行病による打撃を免れさせたものであろう。又他の漁村においてもその打撃の想像されるより遙かに輕少であつた。この事實は漁村における飢饉や流行病に對しての意外に強い抵抗力の存在するものとして注目される。災害の著しかつた關東や奥羽においては勿論異つた結果を生じたと思われるが、漁村と雖も決して信季の言う如く一村人烟を絶つと言つた様な打撃を受けるものばかりではなく、逆に比較的靜穩な状態で災害の時期を通過した村すら存在したのである。

天保の危機を無事に脱した須賀利浦は以後明治に至る迄、他の多くの村が衰退しつゝあつたのに引き替え、人口推移の上では變動の少い経過をたどつて居る。これを死亡者數をとつて考察してみると、文化十五年以後慶應四年に至る迄、三十一人の死者を出した文政五年を除いて、二十人以上の年は全くない。これを文化以前と比較すれば如何にその數が減つて居るかが明瞭である。従つてそこには文化年間を境にこの村に起つた何等かの經濟上の變化が想定されて來る。

事實この時期における漁業の發展は非常に大きいものがあつ

近世における一漁村の人口動態

た。それはこの村における鮪網漁業の創業である。この創設の年代は、一書(註)によれば文政五年となつて居り、又書上帳は

ずつと後れて天保年間から記載しているのであるが、恐らく文化年間を創始期と考へてよいのではなからうか。この漁業については別稿で詳論する積りであるが、村の共同漁業Ⅱ地下網として經營されたため、利益分配は、勿論村の上層階級に多かつたとは言へ、村民全部に及び、その金額は多い年にはこの漁業のみで普通の漁民一戸に付銀二百目近くにも達し、それ以前とは收入の點で格段の相違を來した。

(註) 大林雄也「大日本産業事蹟漁業及水産」(瀧本誠一・向井鹿松編「日本産業資料大系」第四卷所收)。

しかも注目すべきはこの漁業が前述の早田・九木・大曾根三ヶ浦には存在していない事で、幕末における一般的な疲弊期にあつて、その人口を維持し増加させた重要な要因として、この鮪網漁業の存在が果たした役割は大きい。勿論人口増加の理由によるものであろうが、このように利益の多い生産の存在は、利益が村民一般に分配される場合、村の生活に與へた影響は、農村を問わず決定的なものがあつた。

四

このように、安永以後を通じて、須賀利浦は極めて人口吸引力の強い村であつたと言ふ事ができる。死亡率は他村に比し、

特に目立つて高いものではなかつたが、常に八歳子の率を上回るものであつた以上、この村の人口増加は、この流入人口なくしては考えられない。安永四年から明治二年に至る全移動数は、入人二百七十四、出人百四、差引百六十八人が増加している。この数は附近の漁村に比し、逆の關係を示すものである。たとえば大曾根浦は同じ時期に入人五十九、出人百四、差引四十五人が流出している。早田浦・九木浦は他村との出入は少く相互に殆んど同数を示している。では須賀利浦への流入は如何なる内容を示すものであろうか。(註) 入人二百七十四人の内判明せる者の種類・男女別を示すと次表の如くなる。

縁付	男		女		合計
	引越	不縁戻り	引越	不縁戻り	
養子	九八	二	五六	一	一五五
縁付	一三	二	一一	五	二六
計	一一三	二	一五二	六	二六五

この表により、人口流入の内、壓倒的に多いのは養子縁組といつた家族構成の内に見られる。他村に比し八歳子に生長する者の率が少い事は、「家」の繼承のため、かなり廣範圍から養子を求める大きな理由となつた。しかも特に文化末期以後におけるこの村の漁業發展は、他村からの養子縁組と、それによる新しい分家の創設を活發にし、文化十年か

ら文政六年に至る十年間に家数を八十五から百一へと急増せしめていた。(註) 本稿では流入人口のみについてその内容や範圍を述べ、流出人口についてもその内容、範圍は殆んど同程度であり、たゞ数が少くなつてゐるに過ぎない。他方是に比して引越しは九十年間を通じて僅か八件二十四人のみであり、しかもその内には數年を出でずして再び他の村へ越して行つた者も二三あるから、この村へ定着した移住者は極めて少なかつた。共同體的意識の強い村にとつて、他村からの養子縁組を通じての分家創設による家数の増加は容認し得ても、この血縁關係に基づかない他所者の移住は決して好まなかつた。しかし少數ながら移住者は見出されるし、是等の人々が如何にして村の生活に融け込んで行つたかは興味深い問題である。

そこで、全體として、——文化末期以後においてはその差は縮つたとはいへ——家數人口共に増加し、新漁業の創設と共に他村に比較して富裕になつたにも拘らず、自然的な人口變動は依然として死亡者が八歳子に勝つてゐた事實は何を意味するのであろうか。逆に附近の大曾根浦の如きは文化以後人口を減じてゐるが、それは自然増加に上廻る流出人口の大きさによつた。これらの事實は、自然的な人口の増加は、必ずしもその村の經濟的な状態と比例するものではなく、むしろ社會的な、即ち他村との出入關係の方向こそ問題となると言ふ事を示すものである。

る。しかし、須賀利浦における八歳子数の少さは、果して出生率の低さによるものか、或いは又幼児死亡率の高さによるものかは判明しない。

最後にこの村の他村との人口出入の範圍を述べて本稿を結びたい。前記二百六十五人の内譯を男女通算して地域別にみると、附近の漁村から七十二人、半農半漁村から四十六人、農村から八十八人、尾鷲二十八人となつてゐる。残りの三十人餘りの内、同じ紀州の新宮、田邊方面から十數人、伊勢・志摩・三河・大和・淡路・京都・大阪、遠く越中から一二人宛となつてゐる。従つてかなり廣い範圍と通婚してゐるわけであるが是は陸上交通に對して海上交通の便宜さから來る結果であらう。しかし、注意すべき事は、附近村との養子縁組の場合、同じ漁村からは少く、却つて農村、それもやや離れた農村から多く來てゐる事である。これらの農村の状態は全く判らないのであるが逆にこれらの農村にとつては、こゝ言つた吸引力の強い漁村は過剰人口の捌け口だつたのかも知れない。この年代を通じて最も多いのは、古の本村の四十五人であるが、この村は海には面せず「田畑耕作一通に而渡世仕候もの」の多い農村であつた。又次に多いのは引本浦の三十七人であるが、この村は古の本村と共に他の大庄屋管轄區域であり、最も密接なるべき尾鷲との間には更にそれよりも少くなつてゐる事は、少くも人的關係においては、この村が同一の組内よりも、隣の相賀組の引本浦や、古の本村を中心とする農村地帯と結ばれてゐた事を示してゐる。

近世における一漁村の人口動態

る。又距離の點では最も近い隣村島勝浦からは案外少い事も加えて、人口の流入が、地理的な、或いは又政治的な位置とは關係が薄かつた事を示すものである。

附記 本稿において使用する史料は日本常民文化研究所収集の全國漁業制度資料及び徳川林政史研究所所藏の史料に據つた。